

サドにおけるまなざしの問題¹⁾

宮 本 陽 子

Sade dans l'empire du regard²⁾

Yoko MIYAMOTO

0

ミシェル・フーコーはその多くの著作で、様々な角度から、古典主義時代およびそれに続く時代の文化における「見ること〈voir〉」と「知ること〈savoir〉」の緊密な関連、すなわちこの時代の知における視覚の優位性に注目しているが、なかでも《見る＝知る》という知がその力を極め権力〈pouvoir〉に結びつき、具体的な形態をなしたものとして言及されているのが、『監獄の誕生』³⁾におけるパノプチコンである。

パノプチコンとは18世紀の末、ベンサム⁴⁾によって考案された監視のための建築学上の形態である。監視塔を中心に、その周囲に円環状の建物を配し、監視塔のなかから監視人が、円環状の建物を区分けして造った独房にひとりずつ閉じ込められた被監視人を、いつでも、はっきりと観察することができ、そして自分が観察されているということが被監視人の目に常時映っているような仕組みになっている。「周囲の円環状の建物内では一切を見られているが、けっして見るわけにゆかず、中央塔からはすべてを見ることができるが、けっして見られはしない」⁵⁾。したがって、中央塔のなかから誰が見ていてもよいのだ。大人でも子供でも、否、誰も見ていない時があっても構わない。閉じ込められている者に、監視されているという意識をうえつけるだけでよい。監視塔が見えるだけで、閉じ込められている者にとって権力は永続的に可視的なものとなる。そしてそのことによって、閉じ込められている者は権力の拘束をみずから引き受け、服従という役割をみずから担うようになるのだ。

フーコーはこのパノプチコンを、人間同士の相互関係を排除し、ある人々に対する他の人々の従属関係をけっして逆にできないものにし、力の不均斉を支え、強化し、多様化する権力の装置、より厳密に言えば、監視と処罰と矯正を眼目とする、規律・訓練的権力の装置として捉

えている。規律・訓練とは従来、学校や病院、兵営といった閉鎖的な場所で適用され、古典主義時代に完成された制度であったが、ベンサムの仕事は規律・訓練の機構を社会のすみずみまで浸透させることを可能にするものであるとフーコーは言う。「現実的で身体に係わる規律・訓練は、形式的で法的な自由の下層でその土壌を成してきた。(……) 自由を発見した『啓蒙主義』は、規律・訓練をも考案したのだ」⁶⁾。

このパノプチコンを可能ならしめているイデオロギーと同一のもの、あるいは類似したものをわたしたちは同時代の文学のなかに、とりわけサドのジュスチヌ物語の生成の過程に見いだすことができる。もちろん、こうした建築学上あるいは政治・社会学上の現象をそのまま文学作品に敷衍しようとするならば牽強付会の誹りは免れまい。実際、サドの暴力的な犯罪のファンタスムの舞台となる城や地下室の暗さは、パノプチコンの透明な光をもってしても一掃されえないものである。フーコーは、ナポレオン一世が規律・訓練的社会の最盛期にあってなおかつ、見世物中心的な権力という古い側面を残していたことを指摘しているが⁷⁾、これと同様に、否、実社会の経済と同一の経済で動いているわけではない文学作品世界においてはなおさら、あるひとつの現象のなかにすべてが納まるのは不可能であることはあらかじめわかりきったことだ。したがってパノプチコンと作品世界に見られる差異と同一のひとつひとつを挙げ連ねることは差し控えたい。ただ注目したいのは、人と人の関係に決定的な変化をもたらすパノプチコンにおける「まなざし」が、サドの作品世界に同一の機能をもって現われているということ、こうした「まなざし」を出現させるある共通のイデオロギーが想定されうることである。文学作品は作者個人の言葉だけで書かれているわけではない。「意味は『イデオロギーの領域』の一部であり、ディスクールはイデオロギーの特殊形の一つなのである」⁸⁾と、D・マクドネルは立場の違いがディスクール同士を差異づけするという文脈のなかで述べているが、ディスクールが「イデオロギーの特殊形の一つ」であるならば、立場の違いを超えて、ある時代に共通するイデオロギーのディスクールというものも想定できよう。ベンサムがパノプチコンを考案したディスクール、サドが牢獄のなかで小説を書いたディスクールが当然、それぞれ異なった立場に根ざしたものであることは否めないが、しかし同時に、同じひとつの時代の知に支えられていることも否定できまい。立場の違いを説明することの容易さに比べ、知の同時代性を証明することは困難である。とはいえ、サドが3つのジュスチヌ物語、『美徳の不運』⁹⁾ (以下 I とする)、『美徳の不幸』¹⁰⁾ (以下 M とする)、『新ジュスチヌ』¹¹⁾ (以下 N とする) を書いてゆくさなかで、作品世界における見るという営為の重要性が強まり、彼独自のものが立ち現われてくるのと同時に、パノプチコンに代表されるある時代性なるものが色濃く浮かび上がってくるのを無視してジュスチヌ物語を読むことはできない。

実際、18世紀において可視性にとりつかれたのはベンサムが初めてではない。立場や関心の

違いこそあれ、『言葉と物』¹²⁾ や『臨床医学の誕生』¹³⁾ で言及されている植物学者、生物学者、解剖学者たちはもちろん、文学においては、現実の事物の表面を貫き透視するまなざしを想定し、水晶のような透明性を追求したルソーを忘れることはできない。彼の『新エロイズ』のなかで、ヴォルマールは、行なわれることがすべて見られような、闇の部分を残さない家を理想としている¹⁴⁾。サドもまた、1788年に書き上げたという『アリーヌとヴァルクール』のなかで架空の島、タモエにおいて、〈l'œil vigilant〉がすべての住民を見渡すことのできる街を描きだしている。

*Il n'y a ni bourg, ni hameau, ni maison séparée dans l'île; Zamé a voulu que toutes les possessions d'une province fussent réunies dans une même enceinte, afin que l'œil vigilant du commandant de la ville pût s'étendre avec moins de peine sur tous les sujets de la contrée.*¹⁵⁾ 太字強調は宮本

先のヴォルマールは家長であり、このタモエの〈l'œil vigilant〉は司令官のものであるから、いずれにおいても「まなざし」は支配し監督するまなざしであり、なるほど見ることによって懲罰を最低限に抑え、規律を行き渡らせているように述べられてはいるが、しかしいずれにおいても、「まなざし」は常に見る側から語られており、見られるということ、さらに見られていることが目に映るということについての言及が十全になされているとは言いがたい。

見る「まなざし」を見られる者にとって可視的なものにしたこと、ベンサムが斬新なのはまさにこの点である。パノプチコンにおいて、閉じこめられている者は、自分を見ている〈regarder〉者が見えるが〈voir〉、自分を見ている〈regarder〉者を見る〈regarder〉わけではない。閉じこめられている者は自分が見られているということを目にすることで〈se voir regardé〉、みずからを他動詞〈regarder〉の目的語として権力の文法に組み込んでゆく。つまりパノプチコンは、見る〈regarder〉ということの主語が常に権力側にあり、目的語は常に被権力側であるという事態を見られる側、被権力側の目に映るようにすることで、外部からの「まなざし」を見られる者において自己統制の装置として内在化するのである。

この権力の「まなざし」がリベルタンの「まなざし」として作品世界に現われ、ジュスチーヌや犠牲者たちを眺め〈regarder〉、ジュスチーヌおよび犠牲者たちが見られていることを目にする〈se voir regardé〉ことで、リベルタンに対する犠牲者の従属関係が絶対的で取り返しのつかないものとして後者に刻印されてゆくさまをわたしたちは、第三のジュスチーヌ物語、すなわち N において確認することができる。もちろん、この「まなざし」は N において突然出現するわけではない。飽くまでもサドが、I, M, N と改稿を重ねることによって生成されるも

のである。可視性について言うならば、すでに最初の I において、逆説的にではあるが問題にされている。次の M 同様、I において、物語世界は人物＝語り手であるジュスチーナの目に映ったものとして語られているが、美德の化身であるジュスチーナにとって、彼女が遭遇する世界は承認しがたいものであり、また彼女には理解のできないものである。したがって、彼女は物語世界を包括しえない主人公＝語り手とされているので、彼女には見抜くことのできないこと、語ることのできないことのうちに、むしろ見るべきこと、語るべきことがあるように書かれており、彼女の常套手段である故意の言い落としや¹⁶⁾、リベルタンの犯罪の遂行を前にして彼女の目に被せられるハンカチや¹⁷⁾、気絶等¹⁸⁾の装置が、犯罪を不可視なものにすると同時に、不可視なるものの存在の重要性を際立たせている。この不可視なる領域に光をあて、犯罪の遂行を可視的なものとして、より具体的に、より詳細に描きだしてゆくという方向性のなかでサドは M を書き、さらに、N では、物語の局外の語り手を話者とすることで、犯罪を覆っていた不可視の覆いを一挙に払い除け、その結果、語られる出来事に著しい発展をもたらすことになる。つまり I, M, N の改稿にみられるテキストの生成は、まず何よりも可視性に向かおうとする書き方の変化によって実現されているのであるが、この変化に伴って、「まなざし」が次第に物語の場面に組み入れられ、場面を設定してゆくようになる。すなわち、ある人物の姿や行為を他の人物のまなざしと共に描き出すという傾向、犯罪の遂行が単に出来事として生じたものとして語られるよりも、それを誰かが観察しているという設定と共に語られる傾向がすでに M において強く現われている。そして、人が物を見る、人を見るという営為を繰り返し書き続けることを通してこそ、ついにサドは図らずも、ベンサムがパノプチコンにおいて可能にした権力の「まなざし」をリベルタンに与えることができたのだ。見るという18世紀的なテーマの書き直しと、他者を絶対的な従属関係に置く、絶対的自己肯定＝絶対的他者否定というサド独自のテーマの問い直しと同時に繰り返し行なわれることで、両者が結びつき、パノプチコンの規律・訓練、すなわち、対象である人々を分類し、階層づけ、極端な場合は、その資格を剥奪し、無効にさえする規律・訓練と同質の規律・訓練が、犠牲者に対してなされ、犠牲者を絶対的犠牲者として書き変えていったのだ。本稿では、この物語世界を貫く「まなざし」を追いながら、パノプチコンさながらに、それがいかんとしてひとつの力として物語世界に浸透し、秩序立て、見られる者をその力構造のうちに取り込んでゆくかを考察したい。

こうした考察は、第三番目のジュスチーナ、すなわち『新ジュスチーナ』の完成年月日に多少の訂正が加えられようとも、また第二のジュスチーナ、『美德の不幸』と『新ジュスチーナ』の間にサドが『悪徳の栄え』を書いていたとしても¹⁹⁾、何ら訂正を加える必要のないものである。なぜならば、サドがジュスチーナ物語を何度も書いたという事実、そして、ひたすらその書き直しによって、みずからの言葉と時代の言葉を同時に余すところなく語るようになり、み

ずからを18世紀末の作家サドとして我々の前に呈示しているという事実は動かし得ないことであるからだ。

1

I, M, N を通じて、ジュスチーヌの目に映る〈voir〉ものの多くはリベルタンの犯罪であり、それが常に彼女の道徳感を傷つけ、世界観を脅かすのであるが、M, N と書き換えが進むにつれ、ジュスチーヌや犠牲者を見る〈regarder〉リベルタンの目が現われ、この目が捉えたものが加筆されてゆく。例えば M, N において、ジュスチーヌは残虐非道の叔父サン=フロランの本性を疑うことなく一緒に森のなかを逃げる。〈Nous fûmes assez heureux pour en être dehors au point du jour, et sans avoir été suivis de personne;〉¹⁾ という M の数行が、N においてはジュスチーヌを欲望のまなざしで見ると見るサン=フロランの様子および、彼の見たジュスチーヌの姿を加筆することで半ページ以上に膨れあがる。

Ce fut alors, ce fut à l'instant où l'astre vint se réfléchir sur les traits enchanteurs de Justine, que le coquin (Saint-Florent) qui la suivit s'embrasa de toutes les flammes de la lubricité la plus incestueuse. Un moment il la prit pour la déesse des fleurs, allant avec les premiers feux du soleil entrouvrir le calice des roses dont ses attraits étaient l'image; quelquefois pour un rayon même du jour dont la nature embellissait le monde. Elle marchait avec rapidité; les plus belles couleurs animaient son teint; ses beaux cheveux blonds flottaient en désordre; rien ne déguisait sa taille souple et légère; (...) et, **son œil pénétrant et lascif achevait de deviner, sous les voiles de la pudeur dont Justine était entourée, l'entière collection des charmes dont il n'avait aperçu que de légers traits.** (N)²⁾ 括弧内と太字強調は宮本

もちろん、この加筆を、視点がジュスチーヌから解放された故のものに見做すことも可能である。他人のなかに自分と同じものを見いだそうとする、心やさしいジュスチーヌの目を離れることで、悪人サン=フロランの正体が見え、また前を歩いている人物には物理的に見ることの不可能な背後の状況が、物語の局外にいる語り手ゆえに報告可能になったのだとも言えよう。しかし、いずれにしても、この場面の叙述がジュスチーヌを欲望の対象として眺める視線によって支えられていることは否めまい。このジュスチーヌを欲望の対象とするまなざしが、話者=物語の人物から物語の局外の話者へ変わったという形式上の変化の単なる結果としてのみ

現われたのではないということを証拠だてるために、物語冒頭のいずれも局外の話者によって語られる部分から引用したい。

Justine voyant cela fut trouver le curé de sa paroisse, elle lui demanda quelques conseils, (...). (I)³⁾

Justine en larmes[,] va trouver son curé; elle lui peint son état avec 《l'énergique candeur → l'énergie》 de son âge《... → .》 Elle était en petit fourreau blanc《; → ,》 ses beaux cheveux négligemment repliés sous un grand 《bonnet → mouchoir de Madras》; sa gorge à peine indiquée《, cachée → ne se distinguait presque pas》 sous 《deux ou trois aunes de → la double》 gaze qui la dérobaît à l'œil libertin; sa jolie mine un peu pâle à cause des chagrins qui la dévoraient, quelques larmes roulaient dans ses yeux et leur prêtaient encore plus d'《expression. → impression...》 Il était impossible d'être plus belle. (M)⁴⁾ (N)⁵⁾ [] は N において削除, 《 》 は N において改筆, イタリックは N において加筆

上記はいずれも物語の局外の話者によって語られた部分でありながら、大きな違いを見せている。I の語り手は主人公ジュスチーヌの視線にほぼ語りの焦点を合わせ、彼女の関心に従って出来事のあらましを述べているだけである。これに対し M では彼女自身の関心とは関係のない、おそらくは彼女を欲望の対象として眺める者の関心である、彼女の魅力的な容姿が語られている。この絵画的な描写や 〈cachée〉 という表現が彼女を眺めるまなざしの存在を予想させるものの、まなざしそのものを指示する表現はまだ現われない。ところが N においては、〈qui la dérobaît à l'œil libertin〉 という加筆によってリベルタンの目が場面に現われることで、すでに M で語られていたジュスチーヌの肉体がここではっきりと欲望の対象として意味づけされる。こうした例から、まなざしによるジュスチーヌの客体化は、語り手の人称の変化に先んじて起こっているのだと言ってよかろう。

実際、すでに M において、また N においては殊更に、見るということがリベルタンと犠牲者の立場を隔てる装置として用いられている。M, N のいずれにおいてもジュスチーヌは瀉血を趣味とする獰猛なジェルナンドの館に連れてゆかれるが、彼女を迎えるジェルナンドの挨拶の仕方はふたつのテキストにおいて異なっている。

Ensuite, le Comte se leva, et vint m'examiner. Pendant qu'il me détaille, je puis vous le peindre: (...) Après un examen des plus brusques et des plus cavaliers, le Comte (Germande)

me (à Justine) demanda mon âge. (M)⁶⁾ 括弧内は宮本

Le comte fit approcher Justine; et, sans demander aucune permission à la compagnie, il la troussa jusqu'au-dessus des reins, et l'examine des pieds à la tête, de la manière la plus brusque et la plus cavalière.

— Quel âge avez-vous? lui demanda-t-il. (N)⁷⁾

Mにおいてジュスチーナを観察するジェルナンドのまなざしは、彼女を欲望の対象物とする暴力的なものであるには違いないが、観察の仕方が具体的に語られないことと相俟って、リベルタンが犠牲者に持ち得る絶対的権力を表すには至っていない。これに対しNのジェルナンドのまなざしは、単なる好色さよりも、相手の主体性を絶対的に否定する、力そのもの、機能そのものと化したまなざしである。ジュスチーナの肉体を剥出しにするにあたって、彼女の同意を必要としないことなど言うまでもないといわんばかりに、Nの話者は「仲間一同（もちろんジュスチーナは含まれない）の許しを全く得ずに」と述べているが、この横柄なまなざしの前に犠牲者の主体性などまったくないに等しい。こうしたまなざしの出現とともに、かつてIに見られた艶笑小話的な罪のない好色さ（たとえば盗賊たちがジュスチーナの肉体を争い合って、仲間同士で喧嘩をしている間に当のジュスチーナが逃げてしまうといったような）⁸⁾は、Nにおいてはまったく姿を消し、好色さは必ず欲望の対象の主体性を疎外せずにはおかないような、残忍なものとなる。欲望は文字通りその対象を所有する欲望となり、見ることは支配することになるのだ。

相手の主体性を否定するこうしたまなざしは、ジュスチーナひとりの上のみ注がれるものではないことを、ここで付け加えておこう。先に挙げたジェルナンドの妻は、すでにMにおいても、「火のような眼光を放つ」夫のまなざしに晒され、いたぶられていたが（《(...) il considère... ses regards lancent des feux, il blasphème;》M⁹⁾, Nもほぼ同様¹⁰⁾）、Nではさらに、夫人がジェルナンドの放蕩仲間たちの複数のまなざしに晒されることで、横暴で残忍な夫に虐待される妻という構図の上に、リベルタンに屈伏する犠牲者という構図が重ねられる。

La Comtesse, simplement entourée d'une robe de mousseline flottante, se mit à genoux dès que le Comte entra. (M)¹¹⁾ 太字強調は宮本

La comtesse, simplement entourée d'une chemise de gaze à la grecque, se mit à genoux dès que le comte entra; et ce fut dans cet état d'humiliation que nos scélérats l'ex-

aminèrent. (N)¹²⁾ 太字強調は宮本

ジェルナンド夫人の姿勢を〈cet état d'humiliation〉と称するだけならば、単に話者がジュスチーナから局外の話者に代わったことに由来する変化として片付けられましょう。しかし登場人物の増加に伴って生じた複数のまなざしがそこに注がれることで、この M と同じジェルナンド夫人の姿勢が、リベルタンに対する犠牲者の関係すなわち〈l'état d'humiliation〉として、強化され、普遍化され、取り返しのつかないものとなっているのだ。

ジュスチーナのみならず、多くの犠牲者たちに注がれ、その主体性を無差別に剝奪してゆく、こうしたまなざしの出現は、I においては辛うじて成立していたジュスチーナ対リベルタンという対立関係を解消してしまうものでもある。勝負は最初からついていたにせよ、I において両者はそれぞれ善と悪を体現する人物として戦っていた。ふたりの対立は両者の相関関係を前提として初めて成立することがらであり、したがって、リベルタンがリベルタンであるためには美德の砦ジュスチーナが何としても必要であった。例えば、いずれのテキストにおいても、ジュスチーナはサント=マリー=デ・ボワ修道院のハレムの捉われ人となって、他の犠牲^{いけにえ}の女たちとともに破戒僧たちの情欲に仕えることになり、またいずれにおいても僧アントナンが監督役として女たちの部屋を訪れ、ジュスチーナを怯えさせる場面が描かれるが、最初のテキスト I においては、この場面はまだ残忍なまなざしを持たないアントナンとジュスチーナというふたりの人物の間でのみ生起するものとして語られており、小説の構造上、まなざしはまだテーマとなって現われてはいない。

A cinq heures, (...) le régent de jour entra; c'était Antonin, il me demanda en riant comment je me trouvais de l'aventure, et comme je ne lui répondais qu'en baissant des yeux inondés de larmes:

— Elle s'y fera, (...) dit-il en ricanant, il n'y a point de maison en France où l'on forme mieux les filles qu'ici.

Il fit sa visite, prit la liste des fautes des mains de la doyenne qui, trop bonne fille pour la charger beaucoup, disait bien souvent qu'elle n'avait rien à dire, et avant de nous quitter Antonin s'approcha de moi... **Je frémis, je crus que j'allais devenir encore une fois la victime de ce monstre**, mais dès que cela pouvait être à tout instant, qu'importait que ce fût alors, ou le lendemain? (I)¹³⁾ 太字強調は宮本

この太字強調の部分において、「私」=ジュスチーナを震えさせ、考えさせているものは、紛れも

なくアントナンの残忍さであり、その残忍さとは所有し、支配するまなざしの残忍さとおそらく同一のものであろう。そのことが語り手であるジュスチーヌの目に映るからこそ、彼女は自分をアントナン＝(ce monstre) の (la victime) として意識するのだ。しかしながら、物語内容としては、彼女を脅かしているリベルタンの目の存在が予想されるものの、まだ文面に現われていない。彼女をして犠牲者とならしめる装置として名指されるにはまだ至っていない。また、(victime) として閉じ込められている女はジュスチーヌひとりではなく、アントナンの前には当然、(la doyenne) とジュスチーヌを含む (nous) の姿があるわけであるが、出来事は飽くまでもアントナンとジュスチーヌの間で展開したこととして語られている。ここにおいてジュスチーヌは、語り手＝主人公として出来事に立ち合う主体であると同時に、悪徳に脅かされつつも悪徳と戦う、美德の主体として自らを語り、自らをアントナンと対峙させているのだ。残忍なまなざしがまだ現われないということと、ジュスチーヌ対リベルタン、美德対悪徳という対立がまだ成り立つということは同じ意味なのである。

ところが I と同じくジュスチーヌの一人称体によって語られる M では、局外の語り手によって語られる N におけると同様、アントナンは残忍なまなざしをもって登場し、そのまなざしのもとに女たちを屈伏させ、そのうちのひとりであるジュスチーヌはそうしたアントナンを見ることで自分の運命が彼の意のままであること、「犠牲者になる」のではなく、すでに犠牲者でしかないことを思い知るのである。

(...) la Doyenne nous appela bien vite, le régent de jour parut en effet. C'était Antonin, nous nous rangeâmes en haie suivant l'usage. **Il jeta un léger coup d'œil sur l'ensemble, nous compta,** puis s'assit; alors nous allâmes l'une après l'autre relever nos jupes devant lui, d'un côté jusqu'au-dessus du nombril; de l'autre jusqu'au milieu des reins. Antonin reçut cet hommage avec l'indifférence de la satiété, il ne s'en émut pas; puis **en me regardant,** il me demanda comment je me trouvais de l'aventure? Ne me voyant répondre que par des larmes ... 《Elle s'y fera, dit-il en riant; il n'y a pas de maison en France où l'on forme mieux les filles que dans celle-ci.》 Il prit la liste des coupables, des mains de la Doyenne, puis s'adressant encore à moi, **il me fit frémir; chaque geste, chaque mouvement qui paraissait devoir me soumettre à ces libertins, était pour moi comme l'arrêt de la mort.** (M)¹⁴⁾ 太字強調は宮本

ここにおけるアントナンの一瞥はジュスチーヌを他の女たち同様、犠牲者の集合体の一部として数えるものであり、またこの一瞥のもとに、女たちは犠牲者としてとるべき姿を曝すのであ

る。花が光を感じると開くように、主人のまなざしを受けた女たちはスカートを捲くりあげて、服従を表明する。つまり、ここにおいてまなざしはすでに権力そのものとして機能しており、このまなざしの出現とともに、ジュスチヌは主人公＝語り手でありながら、リベルタンに対峙すべき主体性を失ってゆく。リベルタンの投げ掛けるまなざしのうちにジュスチヌは、己れの主体性に対する死刑判決を読み取るのである。

さらに局外の語り手に語られる N になると、〈Il jeta un léger coup d'œil sur l'ensemble, nous compta (...)〉という M の表現が、〈Il jeta un coup d'œil indifférent sur l'ensemble, compta les sujets (...)〉(N, 太字強調は宮本)¹⁵⁾と書き換えられ、ジュスチヌの対象物性は一層揺るぎないものになる。もちろん、この〈nous〉(M) から〈les sujets〉(N) への変化が、まず第一に一人称体の語り手から局外の語り手への変化によってもたらされたものであることは否めないが、しかし、先に指摘したこの部分に見られる I から M への変化の意味を考慮に入れるならば、この M から N への書き換えを、一人称複数が三人称複数になったただだと片付けてしまうことはできない。すなわち、リベルタンと対峙する美德のヒロインから犠牲者たちのひとりへに転落する、I から M への変化の延長上に置いて考えるならば、〈les sujets〉という表現は、文法的に三人称複数扱いになったジュスチヌを含む犠牲者たちに対する単なる比喩ではなく、この言葉の本来の意味でとらえるべきであろう。この言葉によって、ジュスチヌは文字通り、主人に隷属する者、欲望、権力、まなざしの対象物の一部としてのレッテルを貼られてしまうのである。つまり N のこの書き換えは、M によって与えられた方向づけを取り返しのつかない決定的なものにしてしまうのだ。

実際、局外の語り手によってこうしたレッテルを貼られることがなくとも、ジュスチヌが自分に向けられた権力者のまなざしを目にするだけで、絶対的な犠牲者としてのみずからの立場をはっきりと自覚する場面が N の至る所で確認される。

Il est facile de deviner ici quelle devait être la situation de Justine. Ne voyant dans tous ces supplices que l'image de ceux qui lui étaient destinés, elle frémissait: **les regards de l'évêque ne lui annonçaient que trop sa déplorable destinée...** (N)¹⁶⁾ 太字強調は宮本

N の加筆部からのこの引用は、物語の終わりの方で残忍な司教と神父の犠牲^{いけにえ}として差し出されたジュスチヌが、もうひとりの犠牲者に対して行なわれている残虐な拷問を前にして、やがては自分の身に受けるであろう責苦を想像している場面である。目の前の光景もさることながら、ジュスチヌを待ち受ける運命、犠牲者としての〈sa déplorable destinée〉を決定的な

のとして彼女に告げるのは、むしろ司教のまなごしの方である。目の前で繰り返される拷問は、やがて自分に対しても行なわれるであろう責苦のひとつひとつを予想させるが、司教のまなごしはリベルタンが犠牲者に持ちうる絶対的な力そのものであるがゆえに、あらゆる責苦を包括しうる (sa déplorable destinée) をジュスチーナに読み取らせるのである。

目の前で行なわれるリベルタンの行為よりも説得力のあるリベルタンのまなごしは、同様に、リベルタンの下す命令以上に、犠牲者を屈伏させるものでもある。

— Mettez-vous toutes deux dans le même état, dit Verneuil en s'adressant à Justine et à Dorothee, (...).

Tout le monde obéissait; Justine seule faisait quelque résistance, mais **un coup d'œil effrayant de l'homme le plus terrible et le plus rébarbatif qu'elle eût encore vu la détermina promptement.** (N)¹⁷⁾ 太字強調は宮本

これもまた N の加筆部からの引用であるが、ジェルナンドの弟でやはりリベルタンのヴェルヌイユの命令によって、放蕩仲間とジュスチーナが裸になる場面である。したがって、「皆」とは放蕩仲間のことであり、彼らが命令通り裸になるのは放蕩を楽しみたいためであり、ジュスチーナが裸になることを嫌がるのは、自分が放蕩の餌食にされることを知っているからに他ならない。しかし、彼女はヴェルヌイユのまなごしを目にすることで抵抗をやめ、「即刻」命令に従う。ヴェルヌイユの口頭の命令は「ジェルナンド夫人と同じ状態」¹⁸⁾、すなわち裸になれということしか表していないが、彼のまなごしはこうした具体的なひとつの命令のみならず、彼がジュスチーナに対してあらゆる命令を下しうる力そのものを彼女に顕示し、彼の力に対する従属関係を有無を言わず決定的にするものである。つまり、彼のまなごしはジュスチーナを裸にさせるというよりも、より根本的な意味で彼女の意志を、彼女の在り方そのものを決定するのである。パノプチコンにおける被権力者が見られていることを自覚することで自発的にその強制力に従うのと同様、N のジュスチーナはリベルタンのまなごしに晒されていることを知る (se voir regardé) ことで、みずからの立場をわきまえ、自発的にリベルタンの命令に服するのだ。

N においてまなごしは権力そのものであり、その行使は常に一方的に、かつ特権的にリベルタンの側に委ねられている。かつての悪徳対美德という対立関係から、リベルタンの苛酷なまなごしによってリベルタン対犠牲者、権力の行使者対被権力者という従属関係のなかに突き落とされ、みずからこの従属性を引き受ける N のジュスチーナには、物語世界を統合する主人公としてのまなごしはもはや望むべくもない。したがって彼女にとっては意味をなさない世

界の連脈のない断片のなかで、ジュスチーナがどこにいても目にするのは、彼女には理解しがたいリベルタンたちの犯罪であり、主人であるリベルタンのまなざしの下に服従させられた、みずからの犠牲者としての身分、対象物の一部としての自分なのである。

2

ジュスチーナが美德を守る主人公としての主体性をもってリベルタンに対峙することを止める時、かつては当然のことであった、彼女の姿が万人の目に美德の化身として映るということも不可能になってゆく。物語の最初と最後でジュスチーナに有罪の判決を下すパリとヴィルフランシュの裁判所を別にすれば、Iのテキストにおいてはすべてのまなざしが彼女に美德のしるしを読み取っていたものとして語られていたが、M、さらにNに至ると、そうした解釈を否定するまなざしが現われる。その契機となるのが、ジュスチーナの肩に押された烙印である。

I, M, N, いずれのテキストにおいても彼女は、生体解剖を阻止しようとしたために、外科医の怒りを買う。外科医は、彼女が彼を訴えることができなくなるように、復讐を兼ねて彼女の肩に罪人のしるしである百合の烙印を押す。しかしながら最初のテキストIにおいては、この烙印が彼女の美德を否定するしるしとして機能することはなかった。この烙印は不当に押されたものであるという彼女自身の烙印の解釈に異義を申し立てる解釈をするまなざしはなかった。これに対し、次のMの加筆部においては、悪辣なりベルチーナ、ラ・デュボワの口車に乗せられた捕吏が、ジュスチーナの抗議をむしろ罪の証と見做し、〈ses aveux, la marque dont elle est flétrie, tout la condamne;〉(M¹⁾, Nも同様²⁾)と放つ。これは自分の罪をジュスチーナに擦り付けようとするラ・デュボワが仕組んだ企みに捕吏が惑わされたために生じた解釈であるが、Nにおいては、こうしたある目的のために促された意味の方向づけがなくとも、烙印をジュスチーナの悪徳のしるしとして解釈するまなざしが現われる。

MとNのテキストにおいて、物語の後半でリヨンの名士に成り上がったサン=フロランの家をジュスチーナは訪れる。彼は彼女の叔父であると同時に、かつてボンディの森で彼女を強姦した末に、金まで奪った悪人である。M, N いずれにおいても、彼は自分の欲望の犠牲者を集めるための手先としてジュスチーナを使おうと思ひ、彼女を呼び付けたのであった。ジュスチーナはもちろん、この申し出をはね付けるが、Mにおいて、彼の申し出と彼女の拒絶は当事者ふたりの間でのみ展開され、また、彼女の烙印（この時も当然彼女の肩に烙印はすでに押されていたのであるが）に関する言辭は見当らない³⁾。これに対し、Nにおいては、ふたりのやりとりはサン=フロランの召使ラフルールの前で展開し、時にこの召使が口を挟む。

— (...) Qu'on déshabille cette putain (Justine)!... Ah! ah! dit Saint-Florent **dès qu'il aperçoit la funeste marque, il me paraît que ma chère nièce (Justine) n'a pas toujours été aussi vertueuse qu'elle veut bien nous le persuader, et voici des traces ignominieuses qui nous dévoilent suffisamment sa conduite.**

— En vérité, monsieur, dit Lafleur, **cette coquine peut nous déshonorer**: quand vous vous en serez satisfait, je vous conseille de la faire mettre dans quelque cachot où l'on n'entende jamais parler d'elle.

— Monsieur, monsieur! interrompit Justine avec impatience, daignez m'entendre avant que de me condamner.

Et la pauvre fille explique alors toute l'énigme. Mais quelque soit l'air de vérité qu'elle mette à raconter sa malheureuse histoire, Saint-Florent, incrédule, n'en redouble pas moins ses sarcasmes; les injures, les humiliations n'en sont pas moins prodiguées pas ce monstre à cette créature angélique, et d'un mérite bien plus grand que lui aux regards de l'Être suprême. (N)⁴⁾ 括弧内と太字強調は宮本

Nでは犯罪を前にして何もしない神が、語り手やリベルタンに侮られ、それが神の不在の証とされることがこの他の場所においても起こるが⁵⁾、この引用における「神のまなざし」もジュスチヌのまなざし同様、無きに等しいもの、すなわち無意味なものに他ならない。ジュスチヌがここで、烙印の解読の仕方をいかに説明してみせようとも、ラフルールとサン＝フロランの複数のまなざしによって烙印は、ジュスチヌのまなざしが読み取るのとは別の意味に解読され、その意味に従って物語が展開してしまう。これはすなわち、烙印を読み取る有効なまなざしがひとつしかないということであり、ジュスチヌはもはや烙印を解読する主体ではありえず、彼女自身が解読されるべき客体、しかも複数の主体の投げかける同じひとつのまなざしの客体となっているということである。このまなざしによって、ジュスチヌは彼女にとっては最も大切な美徳というしるしを剥脱され、悪徳の烙印を再び押されるのだ。

同様のことが、乞食の群れとジュスチヌの間でも生ずる。Nにおいて、詐欺や強盗、殺人をも厭わない乞食たちの集団にジュスチヌが囚われ、しばらく一緒に暮らすというエピソードが加筆されるが、ジュスチヌを捕まえた乞食たちは、欲望を満たそうとして彼女を裸にし、その時、烙印を発見する。以下は乞食たちが行なった、烙印の解読である。

— Qu'est ceci, pucelle? dit l'un des membres du sénat; il me semble qu'imprimée de cette manière, on n'a pas envie de te perdre; et, **puisque tu fraternises avec nous par ces**

stigmates, tu n'aurais pas dû, ce me semble, contrefaire aussi bien la prude.

Justine alors raconte son histoire; mais aussi peu crue là que chez Saint-Florent, en l'assurant que ce petit malheur ne lui fera nul tort dans la troupe, on l'exhorte pourtant à ne plus se revêtir des voiles de la pudeur. Cette inconséquence, lui assure-t-on, pourrait bien, après ce que l'on voit, aigrir au lieu d'intéresser.

— Mon enfant, dit le chef en se découvrant une épaule où pareille écriture se déchiffrait au mieux, tu vois que nous nous ressemblons; ainsi, crois-moi, ne rougis plus de ce qui t'assimile à ton chef, et apprends que ces marques, loin d'être des flétrissures, sont les lauriers de notre état; baise celle-ci, je vais coller mes lèvres sur celle que tu me montres. Nous sommes trente ici dans le même cas: (...) (N)⁶⁾ 大字強調は宮本

ここでも、いかにジュスチーナが烙印を押された経緯を説明しようとも、乞食たちのまなざしがひとつの意味を読み取り、ジュスチーナのまなざしを無効にする。乞食たちは彼女の烙印に自分たちとの同類のしるしを読むのだ。両者の肩に押された烙印が、彼女を31人目の烙印持ちの乞食として数え入れる。もはや彼女と乞食たちを差異づけするものはない、否、彼女と乞食たちの間に差異を認めるまなざしがないのだと言うべきであろうか。いずれにせよ、彼女は美徳によって唯一の者であることが不可能になり、主張するに値する独自の価値を持たないがごとくになりつつある。そういう事態を引き起こすまなざしが、物語世界を支配しようとしているのだ。

Nにおいてジュスチーナのまなざしを無効にするまなざしが出現するのと同時に、真実に対する彼女の盲目性が打ち消し難い特性として強調されていることも付け加えておかねばなるまい。実際、ジュスチーナの盲目性は最初のテキストIにおいても潜在していたし、Mにおいては語り手としてみずからの盲目性を指摘してさえいた。しかしながら、MとNでは、一人称体の話者から局外の話者への変換も手伝って、盲目性とジュスチーナの関係において著しい差異が認められる。

いずれのテキストにおいても、サント=マリ=デ・ボワ修道院を訪れたジュスチーナは、彼女の言葉が院長の欲望を刺激していることを知らずに、夢中で告白し、神に祈りを捧げているが、Iでは主人公ジュスチーナの目にこの時映った院長の姿が語られているだけであるのに対し、Mではこの時点における観察に批判が加えられている。

《Le père Raphaël m'écouta → Severino écoute》 tout avec la plus grande attention, il me 《fit → fait》 même répéter [même] 《plusieurs → quelques》 détails avec l'air de la pitié et de l'in-

térêt [...]; *mais quelques mouvements, quelques paroles le trahirent pourtant: hélas! ce ne fut qu'après que j'y réfléchis mieux; quand je fus plus calme sur cet événement, il me fut impossible de ne pas me souvenir que le moine s'était plusieurs fois permis sur lui-même plusieurs gestes qui prouvaient que la passion entraînait pour beaucoup dans les demandes qu'il me faisait, et que ces demandes non seulement s'arrêtaient avec complaisance sur les détails obscènes, (...); (I)⁷*
 (M)⁸ [] は M において削除, 《 》 は M において改筆, イタリックは M において加筆

このように M では、この主人公=話者自身の批判によって、院長の本当の姿を暴きだしているが、しかし他方、N の局外の話者は、ジュスチーナに「後で振り返って」「よく考える」ということをさせずに、彼女を盲目状態においたまま、院長のいかがわしい姿を描きだす。この話者の語りによって、院長の行為は 2 ページ以上に及ぶことになり、その猥褻さは飛躍的に発展するが、彼の仕草を辿る語る言葉の節目節目に、ジュスチーナの盲目性を指摘する表現が執拗なまでに繰り返し挿入されている (〈Justine en eût conçu quelque soupçon, si elle l'eût observé.〉 〈tout occupée de son examen de conscience, entièrement recueillie en elle-même, elle ne prit garde à rien.〉 〈si Justine eût été moins aveuglée〉 〈Justine, éblouie par les illusions de son ardent piété, n'entend rien, ne voit rien,〉 〈Justine, immobile, fermement persuadée que tout ce qu'on lui fait n'a d'autre but que de la conduire pas à pas vers la perfection céleste, souffre tout avec une indicible résignation;〉 太字強調は宮本)⁹。I から M の加筆は、盲目性を指摘すると同時に修正しようとするものであったが、N のこの強調はむしろ、盲目性を修正不可能な、彼女の不可避の属性として浮き彫りにし、彼女がまなざしを持ち得ないこと、〈regarder〉できないことを保証するものである。この盲目性こそがジュスチーナをして、リベルタンの修道院長を敬虔な導き手と思わせ、彼女自身を〈la perfection céleste〉に向かって精進する者と信じ込ませている。この盲目性ゆえに、彼女は、叔父のサン=フロラン、泥棒宿のデルヴァル夫人、乞食のガロー、贋金造りのロラン等多くのリベルタンを善人と思い込んで騙され、そして何よりも、自分自身が美德の女としてのしるしを失いつつあることに気づかないのだ。

さらにまた、ジュスチーナ自身がみずから盲目であろうとする場合もある。N において多くのリベルタンが、ジュスチーナに無理遣り放蕩の現場を見せつけようとし、ジュスチーナは見ることを拒もうとする。

— Madame, dit Justine toute rouge, **permettez que je me retire.**

— Non, non, pardieu! dit Delmonse, non, non. Desroches, oblige-la de rester; (...) je

veux qu'elle soit témoin de mes plaisirs, c'est l'unique moyen de lui en inspirer promptement le goût. (...) Justine, asseyez-vous là devant nous, et ne nous perdez pas un moment de vue.

— Oh! **quel supplice, madame, s'écrie l'orpheline en pleurant; laissez-moi me retire, je vous en conjure, (...) (N)**¹⁰⁾ 括弧内と太字強調は宮本

デルモンスは悪辣で淫蕩なりベルチーナであり、デロッシュは遣手婆であると同時にデルモンスの放蕩の助手であるが、このような放蕩や残酷な光景を見ることを強要するリベルタンと、見ることを拒むジュスチーナの姿がNのテキストにおいて何度か観察される。ジュスチーナがまなざしを持つことを拒否するのは、彼女が思い描く世界、すなわち世の中は善意に満ちており、自分は〈la perfection céleste〉に向かって精進するものであるという、いわば盲目のなかで培われた世界観が、デルモンスの猥褻さ、破戒僧の残虐さ等¹¹⁾、悪の現実を見ることによって脅かされ、否定されることを彼女自身感づいていないわけではないからである。Nにおいて善を支えてくれるのは、もはや盲目性だけしかないのだ。

かつては美徳の主体であったジュスチーナが、その主体性と美徳のしるしを失ってゆくのと同時に、その盲目性が本質的なものとして決定づけられるこのNにおいては、まなざしの主体であるリベルタンと異質のまなざしはなく、またリベルタンに彼らとは別のまなざしを注ぎうる異質の知も不可能となる。物語世界はこうして、ひとつのまなざしの力、ひとつの知の支配に浸透された世界となってゆく。

3

ジュスチーナをその烙印ゆえに美徳として識別しないまなざし、彼女に美徳という独自の価値を認めないまなざしが現われるのと同時に、実際、彼女の行動においても美徳の実態が失われてゆくように思われる。

Iにおいては、キリスト教道徳に反するようすすめるということにはけっしてなかったジュスチーナであるが、M、Nの加筆部において、盗賊クール・ド・フェールからソドミーをすすめられた彼女は誘惑に負けそうになる。ただし、MとNでは誘惑のされ方の度合いに多少の差異が認められる。Mではクール・ド・フェールはジュスチーナの抵抗にも拘らず〈malgré mes résistances〉M¹⁾、思いを遂げようとするのであるが、Nにおいては、彼の欲望は抵抗を受けることなく迎えられる〈notre héroïne qui, moitié crainte, moitié séduction, n'osait encore opposer de défense〉N²⁾。かつてIでは難攻不落の美徳の牙城であったジュスチーナ

に、リベルタンの欲望がしみ込み、確実に浸透してゆく。Nのジュスチーナは、さらに放蕩貴族ブレサックに身を差し出すのにも吝かでない。いずれのテキストにおいても、ジュスチーナはブレサックに恋愛感情を抱き、彼の悪徳に対する恐れと思慕の情の間で苦しんでいるが、それでもI、Mにおいては恋が道徳よりも優位に置かれることはなかった。ところがNにおいては、男色とソドミーを好み、しかもそうした行為を厳格な母親の前で行なう³⁾ブレサックの誘いをジュスチーナは拒まないのである。母親を後から犯しながら、Nのブレサックは〈Oh! foutre, qu'il est divin d'enculer sa mère! Approchez, Justine, approchez, puisque je suis en train d'outrager mon culte, venez partager l'offense, faites-moi manier vos fesses.〉と叫んでジュスチーナを誘う。〈mon culte〉とはブレサックの徹底した女嫌いのことであり、従って〈l'offense〉とは彼の趣味に反して女である母親を相手にしていることをさしているのであるが、呼び掛けられているジュスチーナにとっては、息子が母親を凌辱するという本来の意味で〈l'offense〉であるはずだ。ところが彼女はこれに次のように応じるのである。

Justine rougit; mais comment résister à ce qu'on aime? N'est-ce pas toujours une faveur que la pauvre fille en obtient? Son cul mignon s'offre aux intempérances de tous ces libertins; tous le palpent et l'admirent à l'envi. (N)⁴⁾

愛する男とならば、その男がいかに悪辣非道であっても罪を共にすること（〈partager l'offense〉）を厭わないジュスチーナを、Nの語り手はイロニックに語っているが、こうした彼女の態度は、すなわち、美德が必ずしもジュスチーナの守るべき絶対的な行動方針というわけではなくなってきたということの現われとなっている。烙印を悪徳のしるしとして読み取るまなごしが現われる一方で、自らを美德を實踐する主体として捉える彼女自身のまなごしが失われてゆき、心身ともにリベルタンの配下〈sujet〉になり変わりつつあるということがここにも確認されよう。

実際、Nのリベルタンたちは好んでジュスチーナを犯罪や快楽の助手に使おうとする。上記の場面でブレサックが母に対する強姦を完遂するのは、ジュスチーナの「か細い指」を使ってである（〈Elle est condamnée à poursuivre son opération masturbante; il faut qu'elle branle la racine de ce vit niché dans le cul maternel, et de ses doigts délicats s'échappent enfin des torrents de sperme dans les entrailles de Mme de Bressac, qui s'évanouit à cette horreur〉N 太字強調は宮本⁵⁾）。またNのサン＝フロランはジュスチーナに彼が幼女を犯すのに手を貸すことを強要して、次のように命令する。

—Désirable **toi-même** cette petite fille, dit Saint-Florent à la triste Justine; c'est **de ta main** que je veux la recevoir... (...) (N)⁶ 太字強調は宮本

また N の加筆部に登場する、泥棒宿の亭主デルヴァルは彼の犯罪にジュスチヌを巻き込もうとして次のように言う。

Je me plais à vous faire partager le mal, sans que vous puissiez l'empêcher; j'aime à vous enchaîner par vertu au sein du crime et de l'infamie; (N)⁷ 太字強調は宮本

リベルタンたちはけっしてジュスチヌを仲間にしようと思っているわけではない。彼らはジュスチヌと悪を共にしようというのではなく、彼女に悪を共にさせようというのである。彼らはジュスチヌを単に欲望の対象、犠牲者とするだけでは満足せず、彼女を使いさらに別の犠牲者を生み出し、犯罪の繁茂を図ろうとするのだ。欲望の対象であると同時に、媒介として彼女を機能させることで、新しい犯罪の文脈を構築しようとするのである。

かつては、リベルタンの語る言説、あるいは彼らが主語となって犯罪を実現させる文章と対立する、美德を語る文の話者であり、かつ主語＝主体であったジュスチヌが、悪徳の言説のなかに取り込まれてゆく時、N の作品世界は悪徳を権力とする規律・訓練がすみずみまでゆきわたった世界、リベルタンと異質のものの存在がまったく不可能な世界となる。こうした世界において、ジュスチヌは時として、リベルタンと快感まで共にさせられてしまう。I において、また M の途中まで、さらには N の始めの部分においても、彼女はリベルタンたちから邪な愛撫を受けようとも、苦痛をもって応えることでこれに異議申し立てをしている (〈Mais la nature n'avait encore rien dit au cœur naïf de notre intéressante orpheline (Justine): froide, insensible à toutes les entreprises essayées sur elle, elle ne répondait que par des soupirs et des larmes aux efforts multipliés de ces tribades. (...) Tout fait horreur à Justine; rien ne l'émeut, tout lui répugne.〉 N⁸ 括弧内は宮本による)。ところが、M の中程でリベルタンの愛撫に快感を覚えることをみずからに禁じ得ないジュスチヌは (〈on me mit en feu... plus je me défendais, mieux j'étais contenue;〉 M)⁹、N の中程になると、もはやリベルタンと自分を隔てる独自の反応ができない。

Justine décharge malgré elle; (...) et la putain (Victorine), entourée de plaisir, perd son foutre avec des cris, des blasphèmes et dans convulsions bien dignes d'une libertine comme elle. (N)¹⁰ 括弧内は宮本による

上の引用は、ヴィクトリーヌというリベルチヌと、この女の慰みものとなったジュスチヌの様子を描写したものであるが、快樂に対してリベルチヌと同じ反応を見せるジュスチヌにはもはや、悪徳に対して主張すべき独自の価値、それを支える知を持ち得ない。しかも、ジュスチヌがリベルタンと異質の知を持ち得ないということは、彼女がリベルタンと同一の力を持つということではない。快感に達するのが〈malgré elle〉である以上、彼女はリベルタンにより強く、より根本的に屈伏させられているということであり、リベルタンに対する従属がより抜き差しならないものになっているということなのである。このようにジュスチヌはテキスト間においてのみならず、N というひとつのテキスト内でも変化しており、改稿に伴って、そしてさらにNの物語の展開に伴って、悪徳の規律・訓練が浸透してゆくさまを見せているのだ。そしてそれが、リベルタンの犯罪を語る表の物語を裏から支えるネガティブなもうひとつの物語を形成しているのである。

興味深いのは、こうしたジュスチヌ自身の変化に関する書き換えをサドが意識的に行っているとは思われないことである。生前発表されなかったIの原稿をサドが読み直しながら書いたと思われる、原稿の余白の註¹¹⁾や、Nのための覚え書き《Cent onze notes pour la Nouvelle Justine》¹²⁾等を見ると、ジュスチヌが受けるべき不幸な出来事やリベルタンたちの奇想天外で残忍な行為を増やしてゆくことにはサドは意欲的であるものの、ジュスチヌという人物そのものの意味を変化させる意図は窺えない。したがって、ジュスチヌの変質はテキストを書くサドのエクリチュールを通してのみ可能になったことであろうと考えられるのである。こうした予想を裏付けるものとして、ジュスチヌが贖金造りロランに首を絞められるというエピソードの記述を取り上げたい。

I, M, N いずれのテキストにおいても物語のかなり終わりの部分で、ジュスチヌは助けてやった贖金造りから暴行されたうえ、牛馬のように働かされる。M, Nの贖金造りロランには、他人の首を絞めること、あるいは自分の首を絞めてもらうことで快感を味わうという趣味があり、ジュスチヌはM, Nのいずれにおいても彼に首を絞められる。以下の引用はジュスチヌ自身の語りによるMからのものであるが、Nにおいても話者の変更による人称の変化以外は、ほぼ同様の表現で、この時ジュスチヌが感じたことがロランの情欲と共に記述されている。

(...) peu à peu mon organe s'éteint; les serremments alors deviennent si vifs que mes sens a'affaiblissent sans perdre néanmoins la sensibilité; rudement secouée par le membre énorme dont Roland déchire mes entrailles, malgré l'affreux état dans lequel je suis, je me sens inondée des jets de sa luxure; (...). (M)¹³⁾ 太字強調は宮本

Mにおいて、この時「恐ろしい状況にも拘らず」味わった感覚に、語者ジュスチーナは明確な名称を与えることを控えているが、そのことについて、すぐに彼女とロダンは言い合いをする。

— Eh bien! Thérèse, me dit mon bourreau, je gage que si tu être vraie, tu n’as senti que du plaisir?

— Que de l’horreur, Monsieur, que des dégoûts, que des angoisses et du désespoir.

— Tu te trompes, je connais les effets que tu viens d’éprouver, mais quels qu’ils aient été, que m’importe, tu dois, je l’imagine, me connaître assez pour être bien sûre que ta volupté m’imquète infiniment moins que la mienne dans ce que j’entreprends avec toi, (...). (M)¹⁴⁾

太字強調は宮本

ここでテレーズと呼ばれているのはジュスチーナの偽名である。この言い合いは何の解説もされないままこれで打ち切りになるが、このエピソードに先行する I の物語すべてと M においてもまだ保持されているジュスチーナの人物像、とりわけ彼女の羞恥心の強さを考慮に入れて読むならば、ここにおいて彼女が味わった感覚として、少なくとも自覚しているのは額面通り、「恐怖」と「嫌悪感」、「苦痛」、「絶望」だけであり、それ以外はみずから容認しがたいものなのだと判断される。だからこそ、「快樂」を認めようとしないうジュスチーナに向かってロランは「おまえは間違っている」と言っているのであるが、ここにおいてロランにとって彼の意見の正しさを保証するものは彼自身の感覚からの類推だけとなっている。したがって、ここに読み取れるのは、「恐ろしい状況に拘らず」「感覚を失っていない」ジュスチーナが「恐怖」や「苦痛」と共に知覚した (<se sentir>), おそらくは快感と、それに名称を与えることを潔しとしない彼女の道徳感、世界観のずれである。彼女にとって、リベルタンと快感を共にすることそのものが「恐怖」なのであり、「嫌悪感」を搔きたて、彼女を「苦痛」と「絶望」の底へと突き落とすのである。このように M においてすでに彼女自身が、みずからの世界観に一致しなくなり始めているのであるが、それでも語りのなかでこのずれを修正しようとしており、この修正のうちに悪徳に対する美德のささやかな抵抗を認めることができよう。

ところが、N の同じ部分を読んだ後で再び M のテキストにたち戻ると、M の語り手ジュスチーナによるこの修正がむしろ欺瞞のように思われ、美德の形骸化を暴いているかのように読めてくる。これはすなわち N のテキストが、先に書かれた M の解説に対してある方向づけを与えうるようなものとなっているということである。前述の通り、首を絞められた時のジュスチーナの感覚についての記述は、N も M の記述とほとんど変わらないが、それに続くジュス

チーナとロランの言い合い、そこに差し挟まれる解説が、ジュスチーナの主張を完璧に打ち砕く。自分の主張の確証を手に入れたロランはもはや「おまえは間違っている」とは言わず、「おれを騙すつもりか」¹⁵⁾と言う。

— Eh bien, Justine! lui dit son bourreau, je gage que si tu veux être vraie, tu n’as senti que du plaisir.

Rien malheureusement n’était aussi sûr: le con tout barbouillé de notre héroïne démontrait l’assertion de Roland. Un instant elle voulut nier.

— Putain! dit le scélérat, crois-tu m’en imposer, lorsque je vois le foutre inonder ton vagin? Tu as déchargé, bougresse: l’effet est inévitable.

— Non, monsieur, je vous jure!

— Eh! que m’importe! tu dois, je l’imagine, me connaître assez pour être bien certaine que ta volupté m’inquiète infiniment moins que la mienne dans ce que j’entreprends avec toi; (...). (N)¹⁶⁾ 太字強調は宮本

Nの読者は当然、これを悪の規律・訓練の発展という出来事として、先の引用例のリベルチーナと快感を共にしてしまったジュスチーナの延長上に捉える。そして、Mのテキストをこの延長線を遡った地点に置いてみたくなるのだ。注目すべきは、Mにおけるジュスチーナの主張の真偽ではなく、ジュスチーナとロランの対立において、ロランの意見の方がMのテキストの行く末を先取りしているということ、すなわち、〈le plaisir l’emporte sur la douleur〉¹⁷⁾というNの原則に浸透されることになるジュスチーナの変質がここで決定づけられていること、しかもそれがNのテキストから振り返って見ることで明らかになるということである。実際、Mのテキストを書いているサドが、まだ書かれていないNの地点からMを振り返って見ることは明らかに不可能であり、Nのジュスチーナまでを考慮に入れて書いているとは考えられないが、それにも拘らずこのMの記述から次のテキストへの伏線が見えてくる。しかもこうした伏線は、Nのための覚え書きを書いているサドにははっきりと見えていないようなのだ。つまりジュスチーナの変化、彼女に見られる悪の浸透は、テキストにおけるエクリチュールの自己生産性によって実現されたと言うべきものであり、エクリチュールそのものが、みずからを悪の方へと方向づけし、みずからを先取りしながら自己増殖してゆくさまがここに確認できるのである。ジュスチーナに対して行われる悪の規律・訓練の物語は、まさにその増殖運動のなかにあるだ。

IからM、そしてNに至るテキスト間の変化、さらにNの物語世界の展開は、こうして悪

徳を中心にするひとつの円が、その規律・訓練の浸透によってその円周を拡大してゆく運動として読みとれるわけであるが、この円が大きくなればなるほど、悪徳の浸透力は強まり、中心にいるリベルタンと円周上にいるジュスチーヌの立場の違いは開いてゆく。Nの物語の終幕近く、リベルタンの一族がジュスチーヌに極度に残忍な暴行を加える場面が加筆され、この悪徳の円が最大限に拡げられるように思われるが、この暴行がこれ以前に繰り返された夥しい残虐行為を凌駕しているのは、その暴行の具体的内容のみならず、犠牲者の肉体の在り方がこれまでと違ってしているからである。

もちろん、ジュスチーヌがリベルタンの集団によって暴行を受けるのはこれが初めてではない。盗賊ラ・デュボワの手下たち、修道院の破戒僧たち、ジェルナンドやヴェルヌイユのグループや乞食の群れによって、さんざん虐げられ、苛めぬかれてきたジュスチーヌの肉体は、すでに想像を絶するような残虐行為を経験している。

Jérôme (...) pince si fortement les tétons de Jusutine qu'elle jette une cri terrible; le coquin, pour la faire taire, lui sangle cinq ou six coups de poing si vigoureusement dans les flancs qu'elle vomit tout ce qu'elle a dans le ventre. (...)

Il (Severino) dit, courbe Jusutine sur sofa, (...); le supérieur (Severino), son braquemart énorme à la main, s'avance, et le présente au trou mignon; il pousse sans mouiller, il fait brèche; (...)

Clément s'avance; (...) (N)¹⁸⁾ 括弧内は宮本

これは物語の中程に描かれた修道院のなかで、破戒僧たちがジュスチーヌに行なう暴行の場面からの引用であるが、集団によって加えられる暴行の典型的なパターンを見せている。つまり複数のリベルタンがジュスチーヌの肉体のあちこち、あるいは同じひとつの場所を、それぞれの方法で攻撃し、彼女の肉体を占領する。こうした場面において、犠牲者の肉体は当然リベルタンのものであり、リベルタンのなすがままであるが、それでも犠牲者の肉体はひとつの単位として扱われている。身体各所はジュスチーヌの肉体としてひとつのつながりをまだ失ってはいない。少なくとも、ジュスチーヌの胸を傷つけるジェロームは、悲鳴を挙げる彼女の肉体の一部としてこれを攻撃しているものと思われる。

ところが終幕のカルドヴィルという裁判官の一族による暴行の場面では、ジュスチーヌの肉体の各部分がばらばらに占領されてしまう。

—Voici comment, répondit Dolmus. Il faut que nous l'entourions tous; que chacun

adopte ensuite une partie de son corps, et moleste cette partie; c'est-à-dire que nous aurons tous un numéro, et que, tour à tour, chacun fera lestement subir à la patiente la douleur dont il sera chargé. (...)

Les postes se prennent; et voici quelle en est la distribution.

Cardoville s'empare de la sommité du téton droit; Brumeton, son fils, de la racine; le gauche est occupé de même par Dolmus et son fils; Nicette demande le clitoris; Zulma les babines du con; (...) (N)¹⁹ 太字強調は宮本

肉体は、生きているにもかかわらず、こうして腑分けするかのようにして分配され、全体としてではなく部分部分として傷つけられる。

Dolmus lui arrache l'oreille; Cardoville lui fait une incision dans le téton droit; Brumeton égratigne le gauche; Nicette enfonce, deux fois de suite, la pointe d'un canif dans la fesse droite; sa sœur coupe un morceau de la gauche; Volcidor, armé d'une boule qui présente des pointes de toutes parts, en chatouille assez longtemps l'intérieur du con; La Rose pique une veine à la cuisse gauche; (...) (N)²⁰

もはやここにおいては、連脈のない部分部分があるだけで、ジュスチーヌの肉体というひとつの全体は成立不可能になっている。一切れのステーキになってしまった肉が一頭の牛全体をもはや想起させることがないのと同様、テキストのなかで生きたままばらばらに弄ばれている耳や胸、腿は、一個の肉体という概念、一個の生命という概念を否定するものだ。とりわけ、こうした分割の途中に、ジュスチーヌを主語とする文はおろか、ジュスチーヌという名前さえも差し挟まれることがないために、部分を統合する可能性が完全に断たれてしまっている。ここでリベルタンが傷つけているのはもはやジュスチーヌというひとつの全体ではなく、耳であり、胸であり、腿であるといった、諸々の物体である。すでに快感の主体でなくなっているジュスチーヌは、ここにおいて苦痛の主体、生命の主体という資格さえ奪われ、部分をひとつの肉体として統合する当然の権利さえも剝奪されている。美德の主体ではなくなっていたにせよ、ジュスチーヌがジュスチーヌであることの最後の根拠であるはずの肉体までが、リベルタンの破壊的な欲望に浸透され尽くし、その統一性を否定された形で、完全に所有されているのである。『監獄の誕生』において、「旧体制下の刑事司法の極点は、国王殺害者の肉体を無限に切り刻むことであった。それはすなわち、最大級の犯罪人の肉体に対して行なわれる最強権力の顕示であり、その肉体の全面的破壊がその重罪を真実として明らかにすることになるの

だ」²¹⁾とフーコーは述べているが、リベルタンはむしろジュスチーヌの肉体が彼女のものであるという事態そのものを破壊する。ジュスチーヌといういわば犠牲者の代表、悪の規律・訓練のもっとも典型的な対象の肉体から、そのあらゆる統一性を奪い、主体性が宿りうる場所を不可能にしてしまうことが、リベルタンの最高権力の顕示となっている。

リベルタンたちがジュスチーヌを繰り返し暴行すること、サドがそれを繰り返し書くことから可能になったこの場面は、リベルタンによるジュスチーヌの完璧な所有という極限的な記述内容を、もっともそれに相応しい記述方法で描きだしていると言えよう。

4

N のジュスチーヌはこれまで見てきたようなやり方で、リベルタンたちが行なう悪の規律・訓練の最良の生徒であることを全うするが、それではリベルタンたちの方は常に主体であることを全うしていると言えようか。彼ら自身がこのまなざし、この規律・訓練の対象になることはないであろうか。そしてまたまなざしはリベルタンの欲望を十全に満たす装置となっているであろうか。

すでに第一章で指摘したことであるが、N においてはほとんどすべてのリベルタンが快楽の行為の一環として、またみずからが主人であるということを保証する行為として犠牲者を観察している (*« (...) et, le prélat, une lorgnette à la main, examine tout avec la plus scrupuleuse attention. »*¹⁾ (*« (...) ses yeux noirs et méchants la considéraient. »*²⁾ etc.)。しかし、観察するリベルタンも、三人称で語られる小説の人物である限りにおいて、観察状態に置かれざるを得ない。物語の局外の語り手が語る以上、この語り手がみずからのまなざし、知の及ぶ範囲を作品世界に対して自由に想定することができるのは当然のことであり、見ることの絶対的主体であろうとするリベルタンのまなざしを余すところなく語ろうとするならば、同等あるいはそれ以上のまなざしをリベルタンに注がねばならないのも、これまた至極当然のことである。リベルタンをパノプチコン的構造の中心に据え、この構造の機能をくまなく語るには、語り手のまなざしもこの構造にくまなく浸透し、さらにこれを凌駕していなければならない。

しかしながら、この局外の話者が情報の量においてリベルタンと同等あるいはそれ以上であるのは当然であるとしても、情報の質まで同じ必要はないはずである。

いずれのテキストにおいても、放蕩貴族プレサックと下男の男色行為を目撃してしまったジュスチーヌは、そのことを彼らに知られ、縛られたうえ暴行を受ける。例によって、I ではリベルタンのまなざしはテキストには現われず、彼らの行為がその受け手であるジュスチーヌの立場から簡単に語られているだけであるが³⁾、同じくジュスチーヌによって語られる M に

おいては、被観察者ジュスチーヌの目に、観察するリベルタンのまなざしが映っている（*les scélérats s'amuserent de cette posture, ils m'y considéraient en s'applaudissant.*）^{M4} 太字強調は宮本）。しかし〈voir〉することはできても、〈regarder〉することはできないジュスチーヌには自分にまなざしが注がれていることは分かっている、そのまなざしの方、つまり知までは測ることはできない。観察するリベルタンのまなざしが十全に語られるには、ジュスチーヌといういわば盲目の目から解放され、リベルタンのまなざしと同等あるいはそれ以上の知に基づいたまなざしによって観察される N を待たねばならない。

Plus cette malheureuse souffre et plus nos jeunes gens paraissent se divertir du spectacle. Ils la contemplent avec volupté; ils saisissent avec empressement, sur son visage, **chacune des contorsions que lui arrachent ses brûlantes angoisses et modèlent leur affreuse joie sur le plus ou le moins de violence observée dans ces contorsions.** (N)⁵ 太字強調は宮本

しかし、この記述によって明らかになるのはリベルタンが犠牲者をどのように眺めているかということだけではない。N の話者が観察者リベルタンをどのように観察しているかということも読み取ることができる。すなわち、「(リベルタンによって) 観察された痙攣の激しさ」と「彼らのおぞましい悦び」が比例関係に置かれて語られているが、こうした言表が成立するのは、観察するリベルタンのまなざしと同質のまなざしがリベルタンを観察しているからであるということが予想されるのだ。

実際、子供が泣くのを見るのが何よりの楽しみであるという（*son unique passion consistait à voir pleurer les enfants qu'on lui procurait.*）^N⁶、N の徴税請負人デュブールの顔の筋肉はこの予想を裏切らない。いずれのテキストにおいても、ジュスチーヌはデュブールのもとに助力を求めて訪れ、不幸な身の上を語る。いずれにおいても、彼女の話を書く彼の様子が描写されるが、ジュスチーヌによって語られる I, M においては、デュブールは「注意深く」（*Après m'avoir écoutée avec assez d'attention, M. Dubourg me demanda si j'avais toujours été sage.*）^D⁷、あるいは「ひどくぼんやりとした様子で」（*Après m'avoir écoutée avec beaucoup de distraction, M. Dubourg me demanda si j'avais toujours été sage.*）^M⁸ 彼女の話の聞いているだけである。これに対し N の語り手は、「眼鏡を手にして」犠牲者を観察するこのリベルタンを、「注意深く観察」してみせる。

Dubourg était à peindre pendant ce récit. Commençant à s'échauffer pour cette jeune

personne, il se branlotait d'une main sous sa robe de chambre, braquant de l'autre une lorgnette sur les attraits offerts à ses regards. En l'observant avec attention, on distinguait les gradations de la lubricité contourner graduellement les muscles de sa vieille figure, en raison du plus ou du moins de pathétique que mettait Justine à se plaindre. (N)⁹⁾ 太字強調は宮本

ここにおいてデュブールがジュスチヌについて行なっている観察は彼自身の反応を通してしか語られておらず、情報の量はほとんど彼自身に対する観察によって占められているが、注目すべきは、デュブールに注がれる局外の話者のまなざしが、先の N の例においてジュスチヌに注がれるブレサックのまなざしとまったく同質であるということである。苦痛によってジュスチヌの顔に現われる痙攣のひとつひとつを食い入るように見詰めているブレサックのまなざしと同質のまなざしが、情欲によってデュブールの顔に現われる筋肉の歪みのグラデーションを悉さに捉えている。同質とはすなわち、苦痛や快感といった感覚を肉体に現われる引きつりや痙攣、歪み等、肉体の形を变形させる運動として捉え、その運動に、漸進的あるいは比例的なリズムを与えているという点においてである。しかもこの N の話者は、彼の顔についての観察内容だけを叙述するのではなく、「観察すれば、見抜ける」という表現を使うことで、彼を観察するまなざしの存在を同時に示すのだ。リベルタンに対する犠牲者と同様な観察状態にリベルタン自身が置かれていることを、この語り手は表しているのである。ここにおいて、この語りはデュブールの真の姿を見抜けないジュスチヌの盲目性を浮き彫りにするためのレトリックを超えて、パノプチックなまなざしの本質を見せているように思われる。すなわち、まなざしの絶対的主体であろうとするリベルタンも、このひとつのまなざし、ひとつの知の浸透した作品世界においてはこのまなざし、この知に浸透された存在であるのだということはこの語りは垣間見せているように思われるのだ。パノプチコンの権力がある人格のなかにはなく、そのシステムのなかにあるのにも似て、観察するという営為が人格あるいは人物のタイプに付随する行為というよりも、N の物語を展開させる自動的なシステム、装置となり実はリベルタンを動かしてさえているのである。

とはいえ、よしんばリベルタンがまなざしという装置の真の主体ではないにせよ、対犠牲者という関係において、まなざしがリベルタンの権力の保証であり、権力の行使そのものであることには変わりはない。まなざしが人と人を権力者と犠牲者に分けるという機能を果たしてことには変わらない。しかし、このまなざしが人間という範疇から外に向けられた時、事情は変わってくる。

すでに I, M において、ほとんどすべてのリベルタンたちは犯罪を正当化するにあたって、

「破壊的な自然」を援用している。彼らによれば「自然」というのは大きな坩堝のようなものであり、そこに投げ込まれるすべてのものは破壊され、形態を変えて再生されるのであり、人間もその形態のひとつにすぎない。しかるに殺人も真の破壊ではなく、人の形態を変えるだけであるから、犯罪にはなりえず、「自然」の営為を手伝っているようなものであるというのが、大方の論旨である。つまり「自然」とは、制度や文化、宗教といった人間が作りだしたものを超越する創造主、あるいは破壊者という意味であり、「自然」はリベルタンたちの拠り所であると同時に限界でもある。しかし、I, M においては、彼らにこれを限界と捉える意識はほとんど見られない。それはすなわち、I, M においてリベルタンたちは、自分たちを「自然」の一部と見做すことで、「自然」を対象化していないからである。これに対し、N において「自然」は観察の対象になってゆく。リベルタンのまなざしがやがて「自然」にも注がれるようになる。クール・ド・フェールは M, N のいずれにおいても、ソドミーを正当化するために「自然」を援用するが、N の加筆部において、「自然を研究する者」(〈ceux qui l'étudient〉)¹⁰⁾ という言葉を用いている。また I, M, N いずれにおいても、プレサックは宗教を否定するにあたり、やはり「自然」を援用するが、M の加筆部において「観察者の哲学的精神にとって宗教の屁理屈などに何の重要性があらう」(〈de quel poids doivent être ces raisons sur un esprit examinateur et philosophe?〉 M)¹¹⁾ という表現が使われ、さらに N の加筆部においては、この「観察者の哲学的精神」が捉えた「自然」、すなわち「宇宙を構成している無限に変化してやまない組合せがもたらす物質と作用のとてつもない多様性」(〈l'immense variété des matières et des effets que peuvent produire des combinaisons diversifiées à l'infini, dont l'univers est l'assemblage;〉 N)¹²⁾ について言及されている。

このように N のリベルタンたちがまなざしを犠牲者以外のものにも向けるようになっているのは、彼らの犯罪への欲望が人的範疇を超えてしまったからであると思われる。N の破戒僧ジェロームは言う。

Je suis loin de me borner à quelques dépravations partielles: je ne veux pas que l'on soit simplement libertin, ivrogne, voleur, impie, etc.; j'exige qu'on essaie de tout, qu'on se livre à tout, et toujours préférablement aux écarts qui paraissent les plus monstrueux, parce que ce n'est qu'en étendant la sphère de ses désordres que l'on doit nécessairement parvenir plus tôt à la dose de félicité promise dans le désordre. (N)¹³⁾ 太字強調は宮本

犯罪の領域を果てしなく拡げ、みずから人間的条件を凌駕してしまったリベルタンたちの欲望の行き着く果てが、制度や文化といった人的範疇の外にあるとされる「自然」であるのは当然

であり、リベルタンの欲望のまなざしは必然的に「自然」に向けられてゆく。こうした方向性の極点に登場するのが化学者アルマニである。彼は悪を「自然」の唯一の要素と見做し (*«Ne dirait-on pas (...) que le mal ne soit son unique élément (...)?»* N)¹⁴⁾、その秘密を探るために「自然」を観察する。しかし研究を重ねた結果、彼にわかったのは「自然」の秘密を掴むことの不可能性、「自然」を観察の対象とすることの不可能性である。

Mais la putain (la nature) s'est moquée de moi, ses ressources l'emportaient sur les miennes; nous luttions trop inégalement. En ne m'offrant que ses effets, elle me voilait toutes ses causes. Je me suis donc restreint à l'imitation des premiers; ne pouvant deviner le motif qui plaçait le poignard en ses mains, j'ai su lui ravir l'arme, et m'en suis servi tout comme elle. (N)¹⁵⁾ 太字強調は宮本

実際、彼に見ることができるのは「自然」の力の現われだけである。見るべきものの究極である「自然」の動機は観察者アルマニのまなざし、彼の力の及ぶところではなかった。*«voir»*の対象にはできても、本来の意味で*«regarder»*の対象にすることはできない「自然」にまなざしを向けることによって、「自然」はより強大でより謎めいたものとして彼の前に立ち現われ、彼をより大きく凌駕する。「自然」の根源的な力を我がものにできず、その現われをなぞることしかできないというアルマニにとって、これまで行なってきた悪事のすべてが真の犯罪ではなく、「自然」の模倣、しかも現われとしての「自然」の模倣にすぎなくなる。リベルタンのまなざしは、これまで犠牲者に対して彼が主人であることを保証するものであったが、ここにおいて彼のまなざしは、「自然」をリベルタンにとって模倣すべき手本、手のうちを明かしてくれない主人として、そしてリベルタンみずからをその模倣者、悪の規律・訓練の生徒として認識させるものとなっているのだ。

リベルタンたちが、いわば「自然」を背景にして、「自然」に寄り掛かって、まなざしを犠牲者にのみ投げ掛けていた時には彼らの拠り所であった「自然」は、リベルタンが向きを変えて「自然」に対峙する時、彼らのまなざしの前に真の犯罪を犯すことの不可能性の明証として立ちはだかる。実際、「自然」に対峙したNのリベルタンたちはあちらこちらで真の犯罪の不可能性、悪の絶対的主体となることの不可能性を嘆いている。破戒僧ジェロームの苦しみ (*«tout ce que nous faisons ici n'est que l'image de ce que nous voudrions pouvoir faire; et l'impossibilité d'outrager la nature est, selon moi, le plus grand supplice de l'homme.»* N)¹⁶⁾、太字強調は宮本)も、これまでのいわば人間の間における犠牲者に対するリベルタンという立場から、「自然」に対する人間というより大きな尺度の中でみずからを捉え直したことに由来するも

のである。同様の苦しみを嘆くリベルチーナのドロテは、真の犯罪を次のように描きだす。

(...) je souffre peut-être encore plus que vous de la médiocrité des crimes dont la nature me laisse le pouvoir. **Il n'y a, dans tout ce que nous faisons, que des idoles et des créatures d'offensées: mais la nature ne l'est pas, et c'est elle que je voudrais pouvoir outrager.** Je voudrais déranger ses plans, contrecarrer sa marche, arrêter le cours des astres, bouleverser les globes qui flottent dans l'espace, détruire ce qui la sert, protéger ce qui lui nuit, édifier ce qui l'irrite, l'insulter, en un mot, dans ses œuvres, suspendre tous ses grands effets; et je ne puis y réussir. (N)¹⁷⁾ 太字強調は宮本

ここにおいて、リベルタンの欲望のまなざしの前にもはや犠牲者の姿はない。虚空を睨むこのまなざしにとって、これまで犯してきた罪のすべてが模倣となり、幻影となって背後に消えてゆく。そしてリベルタンたちが真の犯罪者の模倣者となる時、彼らの犯罪を書いてきたサドもまた真の創造主の模倣者となる。行なうべきすべて、書くべきすべてが、手の届かない虚空にある。このドロテの嘆きに対するブレサックの答えもそれを追認するものである。

— Voilà ce qui prouve qu'il n'y a point de crime, dit Bressac; **le mot ne conviendrait qu'aux actions qu'établit ici Dorothée, et vous voyez qu'elles nous sont impossibles: vengeons-nous-en sur ce qui nous est offert, et multiplions nos horreurs, ne pouvant les améliorer.** (N)¹⁸⁾ 太字強調は宮本

かつて I, M のジュステーヌの語りにおいては、リベルタンの悪事の諸々の現実を隠しつつ示すしるしであった「犯罪という言葉」(le mot)が、ここにおいては不可能と同じ意味になり、リベルタン＝サドを拒むと同時に魅了する。この言葉を満たす行為を行なうことがリベルタンの永遠の欲望となり、それを書くことがサドの永遠のテーマとなる。

注目すべきは、秘密を掴み得ない「自然」、凌辱し得ない「自然」の大きさとその多様性が測られたのが、他でもなく、観察の対象、犯罪の対象にしようとする「自然」にリベルタンのまなざしを向けたからであり、だからこそ、この「自然」と対峙すべく、「犯罪」の意味も飛躍的に変化したのだということである。そしてリベルタンの犯す悪事が甚だしいものであればあるほど、また複雑なものであればあるほど、これを模倣として否定しうる「犯罪」と「自然」は複雑繁茂を極め、その大きさは広大に拡がってゆく。リベルタンがこれまで行ってきたことの一切を無効とし、またサドがこれまで書いてきたことの一切と決別しようとするまさにその時に、「犯罪」と

「自然」とが、無限に変化してやまないその多様性のなかで、無限の大きさに膨らむのである。

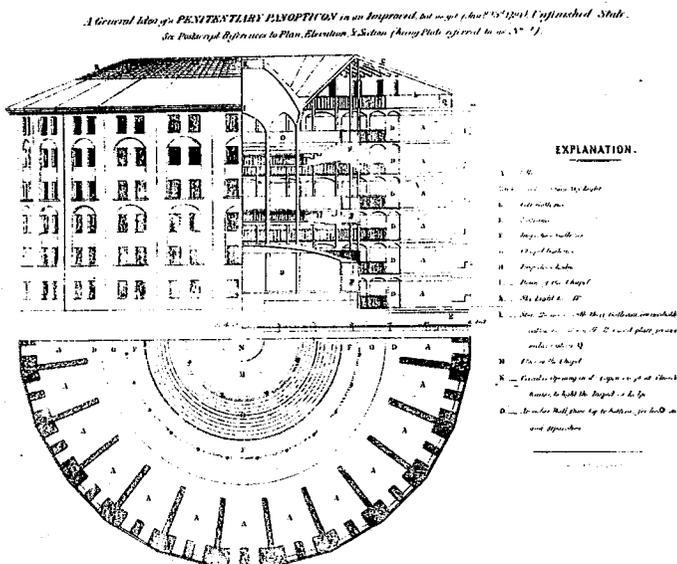
まなごしによる支配という18世紀の考案した、おそらくは最大級の人的な力が、ひとつの小説世界においてリベルタンというその可能性を最大に発揮しうる媒介を得ることで、自然と対峙し、その結果、人的な力の表現である犯罪とその外にある自然が共に前代未聞の無限性をもって描きだされた。まさにそのことこそが、この小説をしてサドの真の創造とならしめているのである。

註

0

- 1) この拙論をまとめるにあたって、多くの先輩の方々から貴重なアドバイスを賜り少なからず参考にさせて頂いた。厚くお礼を申し上げたい。
- 2) Michel Foucault, *Naissance de la clinique*, 1er éd., 1963: 《Le thème idéologique, qui oriente toutes les réformes de structures médicales depuis 1789 jusqu'à Thermidor an II, est celui de la souveraine liberté du vrai: la violence majestueuse de la lumière, qui est à elle-même son propre règne, abolit le royaume obscur des savoirs privilégiés et instaure l'empire sans cloison du regard.》, éd., 《Quadrige》, PUF, 1988, p. 38
- 3) M. Foucault, *Surveiller et punir, naissance de la prison*, éd. Gallimard, 1975.
- 4) Jeremy Bentham (1748~1832) イギリスの法学者、哲学者。功利主義の主唱者として名高い(ミシェル・フーコー『監獄の誕生』田村俣訳、新潮社、巻末の固有名詞索引より引用)。『一望監視施設補遺』(1791)、『ベンサム著作集』(ボーイング版、1838-43、11巻)
- 5) M. Foucault, *Surveiller et punir, naissance de la prison*, p. 203
- 6) *Ibid.*, p. 223~224
- 7) *Ibid.*, p. 219
- 8) ダイアン・マクドネル『ディスクールの理論』里麻静夫訳、新曜社、1990年、64ページ、Diane Macdonell, *Theories of Discourse: An Introduction* (Basil Blackwell, 1986)
- 9) D.A.F. de Sade, *Les Infortunes de la vertu*, 1787, テキストは Gallimard, folio, 1970. を使用。以下 I とする。
- 10) D.A.F. de Sade, *Justine ou Les Malheurs de la vertu*, 1791, テキストは Librairie Générale Française, Le livre de poche, 1973. を使用。以下 M とする。
- 11) D.A.F. de Sade, *La Nouvelle Justine, ou les Malheurs de la vertu*, 1797?, テキストは Pauvert, Œuvre complètes du Marquis de Sade, t. 6, t. 7 1987. を使用。以下 N とする。
- 12) M. Foucault, *Les mots et les choses*, éd. Gallimard, 1966.
- 13) M. Foucault, *Naissance de la clinique*, 1963.
- 14) Jean-Jacques Rousseau, *La Nouvelle Héloïse*, 1761, テキストは Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, Œuvres complètes, 1964, t. II, p. 424.
- 15) D.A.F. de Sade, *Aline et Valcour ou le roman philosophique*, publié en 1795, テキストは Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, Œuvres, 1990, t. I, p. 679.
- 16) I, p. 111~112, p. 166, etc.,
- 17) I, p. 138.
- 18) M, p. 72.
- 19) Jean-Jacques Pauvert, *Éditer Sade, Histoire d'un combat de deux siècles*, dans *La fin de l'ancien régime*, PUF, 1991, によれば、N は定説の1797年ではなく、*L'Histoire de Juliette* の後で、1800年に出版されたということである。真偽のほどは、三つのジュスチーンが収められるプレイアード版の第二巻の出版を待たうえて判断したい。

- 1
- 1) M, p. 69.
- 2) N, t. 6, p. 101~102.
- 3) I, p. 81.
- 4) M, p. 13.
- 5) N, t. 6, p. 36.
- 6) M, p. 254~255.
- 7) N, t. 7, p. 118.
- 8) I, p. 110.
- 9) M, p. 272.
- 10) N, t. 7, p. 145.
- 11) M, p. 270.
- 12) N, t. 7, p. 141.
- 13) I, p. 180.
- 14) M, p. 202.
- 15) N, t. 6, p. 318.
- 16) N, t. 7, p. 354.
- 17) N, t. 7, p. 170.
- 18) N, t. 7, p. 169~170.



J. ベンサム作、パノプチコンの設計図
(*The Works of Jeremy Bentham*, éd. Bowring, t. IV, p. 172~173).

- 2
- 1) M, p. 383.
- 2) N, t. 7, p. 377.
- 3) M, p. 293~304.
- 4) N, t. 7, p. 249~250.
- 5) N, t. 6, p. 160, etc.
- 6) N, t. 7, p. 257.
- 7) I, p. 158.
- 8) M, p. 160.
- 9) N, t. 6, p. 247~250.
- 10) N, t. 6, p. 48~49.
- 11) N, t. 7, p. 75, etc.

- 3
- 1) M, p. 55.
- 2) N, t. 6, p. 84.
- 3) I においてブレサック夫人はブレサックの母, M においては叔母, N においては再び母となっているが, 彼がブレサック夫人の目の前で放蕩を行ったり, 放蕩に彼女を引き込むという出来事が記述されているのは N においてのみである。
- 4) N, t. 6, p. 141.
- 5) N, t. 6, p. 141.
- 6) N, t. 7, p. 251.
- 7) N, t. 7, p. 91.
- 8) N, t. 6, p. 61.
- 9) M, p. 150.
- 10) N, t. 6, p. 323. N, t. 6, p. 212 においても同様。
- 11) *Notes marginales de Sade, dans Les infortunes de la vertu*, Gallimard, folio, p. 294~296.
- 12) *Cent onze notes pour la Nouvelle Justine*, Œuvres complètes du Marquis de Sade, Pauvert, tome 6, p. 575~602.

- 13) M, p. 322.
- 14) M, p. 322~323.
- 15) サドは多くの場合, 〈en imposer〉を〈tromper, en faire accroire〉の意味, すなわち18世紀における〈imposer〉の意味 (Dictionnaire de Richelet 参照) で用いている。
- 16) N, t. 7, p. 305.
- 17) N, t. 7, p. 212.
- 18) N, t. 6, p. 267.
- 19) N, t. 7, p. 389~390.
- 20) N, t. 7, p. 391.
- 21) M. Foucault, *Surveiller et punir*, éd. Gallimard, p. 228.

4

- 1) N, t. 7, p. 353.
- 2) N, t. 7, p. 384.
- 3) I, p. 113.
- 4) M, p. 80.
- 5) N, t. 6, p. 113.
- 6) N, t. 6, p. 38.
- 7) I, p. 93.
- 8) M, p. 25.
- 9) N, t. 6, p. 38.
- 10) N, t. 6, p. 82.
- 11) M, p. 92.
- 12) N, t. 6, p. 134.
- 13) N, t. 7, p. 35.
- 14) N, t. 7, p. 40.
- 15) N, t. 7, p. 44.
- 16) N, t. 6, p. 281.
- 17) N, t. 7, p. 225.
- 18) N, t. 7, p. 225.